

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福社会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成28年 4月 第182号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

認知症—その誇りと尊厳に応える介護を目指して

老いて認知症になった時、初期は認知・判断能力の減退・喪失がまばらに起こり、体力・気力に余裕が残る分、本人の不安も大きく、周りの人の「困り度」も増幅して「混乱期」となります。しかし病状が進行し重度化すると『大半の人』が長年の生活で培った感性・感覚・経験則を働かせ、他者との距離を測り、居場所を探り、社会性を発揮して逞しく暮らす「安定期」に入ります。認知能力が回復する訳ではなく、社会の一員として蓄えた感性と感覚が生活を支え、認知症の故に生じる変化を経験則がしなやかに受止め、新たな見知らぬ途にも果敢にチャレンジし、結果としては失禁や徘徊などを繰り返す事になりますが、誇りを持って暮らされています。

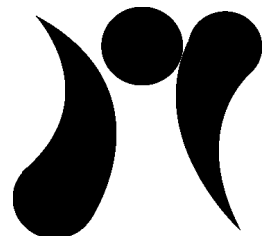
更に進行し重度化すると、体力の低下が顕著に現れ始め、自他ともに最期を意識する終末期を迎えます。その終末を他者に委ねる処が、人間のみが持つ『本能的習性』です。『最期への変化』を他者に委ねて『原体験』の機会を創り、遺伝子では伝わらないものを伝えて人生を締め括り、『変化に柔軟な人と社会』を創る為の『基礎』と成るのです。

世間が示す「知性と理性」は、認知症の人を『責任無能力者』として「管理・監督」の対象にします。しかし人が老いて最期が近づく時、知性や理性ではなく『感性と感覚』が生活を支え、『本能的に時期を誤らず』に他者に委ねる習性が働きます。『遺伝子を伝える本能』と共に受継いだ『終末期を委ねる習性』に因り、『最期を迎える覚悟』と共に『遺伝子では伝わらない思想と社会性』を伝えます。そして今、徘徊途上で事故死するような『思わぬ変化』に対して、『委ねられた社会』が如何に対処するのか？が鋭く問われています。

ピンピン・コロリから世は大きく変化・発展して今は、大半の人が要介護や認知症になって10年程を暮らします。要介護者にとっては存在そのものが社会での活躍であり、柔軟に変化する姿を伝えて長い人生の成果が実り、誇りある最期を迎えます。その成果と誇りに『介護』が向き合うのです。

『責任無能力者』の監督義務を介護が担うのか？或いは、吾身の終末を委ねる『主役の覚悟と誇り』に介護が応えるのか？終末

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

期と最期の暮らしを支える介護が、職業として『社会的な尊敬と高い評価』を獲得できるか、否か?の『分岐点』に今、立っています。まさに『正念場』です。

長い人生の成果として蓄えた資産や収入、公的介護保険による基金、民間賠償保険への加入、等々の組合せに叡智を傾け、長寿の末に直面する認知症の故に『人生の成果と誇りを無にする愚』は避けたい、と切に願います。

主役への敬意を忘れず、長い人生の『成果と誇り』に応じて、『尊厳を護る途』を探りたい、と心より念じます。

せいりょう園 渋谷 哲



いきいきした生活を送る

ユニット型特養 介護職員 藤田玲子

せいりょう園ユニットにお世話になり半年が過ぎました。ユニットケアで大切なのは、なじみの落ち着ける場所で、一人ひとりの生活のペースに寄り添い、その人らしい生活を支援することです。リビングは交流の場として、コミュニケーションを図り他の人との人間関係を築くところであり、居室は個室であることで気がねなく家族が長時間滞在でき、毎日多くの方が訪問されています。生活支援では衣食住と分担し協力してケアが成り立っています。

特に食べることは生きることへの援助であり、ユニットごとにキッチンがあり、そこで調理することでより家庭に近い環境です。だしの匂いや煮物の匂いで「今日のお昼は魚の煮つけだね。」と利用者様が楽しみにされるのは微笑ましいことです。

他の施設では食事は外部業者に委託していることが多い中、せいりょう園では同じユニット職員が調理して、情報の共有もしやすく日々のお年寄りの体調にも配慮しています。食材も国産品を多く使用し、安心安全な食事を提供しています。利用者個々の状態に応じて、常食・軟食・ミキサー食を選択し、見た目も重視して季節の食材や四季の飾り物、色の組み合わせ、料理に合った食器を用い温かい雰囲気大切にしています。

以前、私は介護老人保健施設の認知症専門棟で働いていましたが、最後まで利用者の楽しみは食事でした。そのことから介護のステップアップとして3年前に福祉調理の学校に通い調理師の資格を取得しました。介護の現場で福祉調理の勉強したことを生かしていけることが今後の目標です。

【せいりょう園空き情報 平成28年 4月20日現在】

- ・サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：空きあり
- ・サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：5室
- ・ケアハウス：空きなし（バス・トイレ・キッチン付24㎡）
- ・グループホーム：空きなし
- ・グループホームまどか：空きなし

[問合せ先] せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433



「出会い そして・・・」

ユニット型特養 介護福祉士 富永映子

“出会いは別れの始まり”と言いますが、私は幼い頃、おじいちゃん・おばあちゃん子でした。両親が共働きをしていた事もあり“しつけ”というの、おじいちゃん・おばあちゃんにしてもらった様な記憶があります。

その祖父が十数年前のある朝、私の夢の中に出て来て「映子、一緒に行こう」両手を肩にかけてきました。とっさに「イヤー」と叫んだ時、祖父はスーッと消えていきました。目が覚め「今のは何だったんだろう」と思いながらもその日も仕事に行ったわけですが、その日の午前中に祖父は亡くなりました。私の事を気にしながら夢に出てきたのか？いまだにそれは謎のままです。

“介護”に興味をもち始め、せりりょう園で働くことになりました。ユニットに配属となり、緊張と不安で迎えた初日、ある利用者に出会いました。「あんた綺麗やなあー、ほんま綺麗」「色が白うてうらやましい」「がんばんなさいね」そう言って大きな声で、「雨雨降れ降れ母さんが・・・」と唄いながら車椅子を自走して行かれました。それがNさんとの出会いです。

そんなNさんも昨年11月に骨折して食事以外は居室での生活が始まり「足が痛い」と言いながらも居室からは大きな歌が聴こえて、職員には色々な話をしてくださいます。「私は料亭の娘」「まかないの残りを食べてこんなに大きくなった」「ご飯が美味しい」「何を食べても美味しい」何度も繰り返しそう語っています。若い頃の趣味は、踊り・習字・お茶・生け花・編み物だったそうです。ご主人へのお供えの花もユニット前に咲いている花を生けておられます。通院を繰り返し、12月にリクライニング車で、ホールに出てこられるようになり、今年の2月には車椅子で自走するまでにお元気になられ、ユニット全体に歌声が響くようになりました。

もう一方、Wさんについてお話をさせていただきます。Wさんは交通事故をきっかけに麻痺になり車椅子の生活を余儀なくされています。せりりょう園に入所になるまで色々な施設を回って来られたそうです。Wさんの交通事故をきっかけに事故のあった交差点に信号機がついたそうです。それだけ大きな事故だったようです。毎日のようにクロスワードをして時には職員に問題を出される事もあります。頭のいい方です。唯一の楽しみが“お酒”。「飲んだうちに入らん」と言いながらも頬をポッと赤くして奥さんが持って来て下さる“お酒”を楽しみにしておられます。

“十人十色”さまざまな人生を送って来られた方々、そんなユニットの利用者様に出会えた事に感謝しています。“ふるさと”と言う歌を利用者様と唄う事がありますが、それぞれ“ふるさと”の事はよく覚えておられます。自分のふるさと、今迄の話をして下さる時は顔が輝いてみえます。“感情”というものはいつまでもあり、その中で利用者様の一言。「あんたらは時間が来たら、そうやってきて・・・すぐ帰ってしまうやろ」「お茶が飲みたい時に飲まれへん」「背中が痛くても向きも変えられへん」と言われた事があります。確かに一人ひとりに時間をかけ、向き合っていなかったように思います。

ユニット入居者30人、生活している方々に向き合い、傾聴し、第二の“ふるさと”“棲家”がユニットで良かったと言って頂けるように私自身、時間の許す限り『傾聴』『寄り添い』介護の工夫を精一杯頑張りたいと思います。



「生ききるための在宅介護」

3月の語ろう会では、今年度のまとめとして、地域包括ケアの視点である「生ききるための在宅介護」をテーマに参加者の皆さまに語っていただきました。

自宅で最期まで過ごす事をどう思っておられるのかをお聞きすると、

- ・子供が離れて、夫と二人暮らしになり、健康面、家の事全般に不安を感じる。
- ・2人で介護しているが、施設入所待機者も多く、自分でも施設入所が良いのか。老老介護になるのか。
- ・今は夫婦2人何とか生活できているが介護が必要になった時にどうすればいいのか。夫婦で細かなところまでは話し合っていない。

など、今後どうなっていくのか分からない事に対しての不安な状況が伺えました。

参加者の多くが年齢的には人生の終末期、そしてその先にある「最期」を見ずえる事が、なかなか「自分のこと」として受け止められないのが現実なのです。

最期まで自宅で居るとい事が、どのような状況を経て成り立っていくのかを身近で経験させて頂いたケアマネジャー、相談員が、それぞれの事例を紹介しました。

事例①

高齢の夫婦2人暮らしで、夫がガン末期と診断。本人への告知をしましたが、昔から病院嫌いで入院を拒否。在宅を希望しました。しかし妻は夫を自宅で看取る事に不安が強く、在宅療養の維持は困難と考えられていたようです。そんな時、利用していた訪問看護師より夫の病状の説明と最期を迎えるまでの変化を、その時どきに細かく教えて貰い、漠然とした不安を夫の病状の変化に対応できうる事で在宅を覚悟され、専門職のサポートを受けながら夫の最期を自宅で看取られました。



平成28年3月22日（火） 彼岸の法要



毎年、春・秋の彼岸の法要では、稲美町の常泉寺住職にお越しいたします。今回も、ありがたい御読経と法話をいただきました。

お彼岸は1200年以上も前より行われていたそうです。法話の中では「人間の心は全てを満足することは中々ないのですが、『自分の想いに縛られず、心は自由に』これが般若心経の『心』なのです。」とのお言葉を頂戴しました。

事例②

特養の入所相談窓口地域に70代の男性が母親(90代)の介護の事で来所されました。元気だった母が急に動けなくなり、寝たきりとなり、それなりに世話をしていたが弱っていく母親を見ていると、いつ息が絶えるか分からない。どうしたらいいのかという相談でした。

今迄も隣り合わせで住んでいたが、母も自分で出来る事はして自立した生活をしてきた。そういう母を見て、最期まで自宅でという気持ちがある。本人も動けないながらも苦痛表情なく困っていない現状でした。このままの状態を維持するために、往診医を決め、サービス利用へと連携し、必要な部分だけのサポートで自然な死を迎えられました。

話を聞いた参加者の皆さんより感想を伺いました。

- ・自宅で亡くなるという事には、やはり家族の不安・負担がある。専門職の方よりフォローの方法を説明して貰えると気持ちに余裕が出てくると思う。
- ・金銭的な事の負担もあるので、その部分も一緒に考えてほしい。
- ・家に居ながらも介護保険のサービスを使って暮らせる事例を聞いて少し安心できました。

現在「6割の人が家で死にたい」との希望を持っています。しかし実際には8割の人が病院で亡くなられています。出来るだけ住み慣れた地域で最期まで過ごすためのサポートとして、地域包括ケアがあります。

生活支援、介護・医療・予防、住まいに「利用者・家族の心構え、覚悟」が何よりも必要です。この自己決定に対する支援が、私たち専門職の一番大事な支えであり、見極めであると強く感じます。

「最期は自宅で」と覚悟していても、その時その時で揺れ動くことはあります。多様な看取りの在り方や可能性、具体的な選択肢など、十分な話し合いをしていくことが重要なのかと思います。

(老人介護支援センター)



厨房だより

管理栄養士 田村愛弓



今年の春も園内の桜は美しい姿を見せてくれました。せりょう園では毎年恒例のお花見会が開かれ、利用者の方々は園内や園周辺の桜を見に散歩へ出かけ春を満喫されていました。

厨房では4月から、春らしいメニューとして豆ごはんやアスパラを使った料理を提供しています。うすいえんどうやアスパラガスは共に栄養豊富な食品で、高血圧や動脈硬化予防に効果的な食品といわれます。また、うすいえんどうに関しては不溶性食物繊維が多く含まれており、便秘改善効果が期待できます。その他にも身体にとって良い効果をもつ食品ですので、ぜひご家庭で旬の食品を使ってみてはいかがでしょうか。





仏教講話 4月4日(月)



真宗 大谷派 光念寺 本多 正尚 住職

朝から春雨の後、あいにくの曇り空でしたがせいらょう園のシンボルツリー桜の木は満開で、花々と緑の木々をしっとりと濡らし、生き活きと美しい彩をはなっていました。これから芽を出す草花にとっては恵みの雨となりました。

本日の仏教講話は真宗大谷派光念寺 本多正尚ご住職です。何度か来て頂きご講話下さっていますが、今日は2階の窓から外をご覧になり「桜の花がよく見えて、ここも明るくて雰囲気が良くなって気持ちがよくですね。」と花の季節に相応しい話のスタートをされました。

「親鸞聖人は4月1日がお誕生日です。お経さんを勤めるのではなくて仏様の歌を唱ってお誕生のお祝いします。4月8日はお釈迦様の誕生日で、『花祭り』をします。空から花や恵みの雨が降ってきたりする様をお釈迦様の頭の上から花びらを投げかけたり甘茶をかけて表し、お祝いをします。私たちも仏教会で加古川の駅前通りで花祭りをしています。小さい花御堂にお釈迦様をお祭りし、甘茶を準備してもらって頭上から降りかけ読経します。」

お釈迦様の誕生日から最期を迎えられた時の話をされました。35歳で悟りを拓かれ、歩きながら話を説いて廻られた。苦行されているお釈迦様に一番最初に食べ物を恵んだのはスジャータ(女性)、亡くなられる前に恵んだのがチュンダ(男性)であったそうです。お釈迦様はその時の事を忘れず感謝され、この二人の事を語り布施の心を説かれ亡くなられました。



1本桜を見上げて鑑賞



食事会后、アトリエで「街角ピアノ

お花見 2016

平成28年4月2日(土) 毎年恒例の「お花見食事会」を園内で行いました。

例年は第2土曜日に行っていましたが、散り際である事が多かった為、今回は1週間早く開催しました。

今年の花見会は汗ばむ陽気の晴天で、桜も満開でした。入居者・ご家族・職員も、せいらょう園近くの桜を眺めて楽しみました。



加古川南高校合唱部のコーラスを聴き、共に歌う。



後日(4/8)、散りゆく桜を眺める。

ノコンサート」を開く。

次に出石市丹東町の西本願寺派のご住職に聞いた話をして頂きました。住職が村の中をお参りの途中で牛飼いさんに出会いました。「暑いのに大変ですね。」と声をかけられ、返ってきた言葉が「そら牛を飼うのはえらい事です、儲けにもなりませんし。」と文句を言うような挨拶が返ってきました。また、違う日に別の牛飼いさんに出会いました。その人にも同じように声をかけると、その人はにこっと笑って「おかげ様で牛に養ってもらっております。」と返事が返ってきました。毎日牛の様子を見ながら世話をして、同じような土地の中で同じような規模の中で仕事しているのに何が違うのでしょうか。前の牛飼いさんは自分がする事ばかりを見ているのでしょうか。自分がしてやってきた事ばかり、口から出て来るのは、ああもしてやった、こうもしてやったと言っているのに対して次の牛飼いさんは自分がしてもらった事が見えていたのでしょうか。なされた事を知るといのは仏教でよく言いますが、そのような気持ちになるのは当たり前前で難しい事です。おかげ様でと自分が出来る力を頂いていると感謝する事は幸せですね。

今生きている事は当たり前ではありません。自分の命に終わりがある事を知らせて頂けるのは命の方からの大きい呼びかけなのでしょう。有り難い事です。おかげ様で命のあり様を知らせて頂いて生きる事が出来、ここまで来れましたと日々の生活の中で気づかせてもらえる事がありましたら喜びや力になります。自分が来た途に感謝し手を合わせて下さいと締めくくられ、合掌して講話を終えられました。

花祭りの話を聞きながら、幼い時に祖母に連れられて行った時の事を思い出しました。近くの薬師寺でお釈迦さんの誕生日をするから行こうと言われて行った記憶があります。小さいお堂にたくさんのお花を飾り、その中に像がありました。皆で甘い香りの甘茶をかけ、多くの方が手を合わせていました。終わりに甘茶を飲ませてもらい、黄色いおこわ（お赤飯ではなくて）をもらって帰った事です。年に1回だったろうかと思いますが、その後2年程行ったような気がします。その時はお釈迦さんって誰？とか何する為に集まるのかも分からないまま、ただ賑やかな中で桜が咲き誇りお花見だと喜んでいました。ご住職の話聞き、あの時の事が『花祭り』であったと初めて分かりました。

急に本日予定のご住職に所用が出来、前日に代行を依頼されたにも関わらず快くおいで頂き、本当にありがとうございました。

(岡村 照代)



平成28年4月6日(水)兵庫大学フレッシュマンセミナー



兵庫大学生涯福祉学部社会福祉学科の新生が、コミュニケーションスキルを身につける初歩的な学習の場として、在校生、先生と共に総勢40名で、せりょう園に来られました。

未来のソーシャルワーカー達です。

園内を見学した後、りょうえんカフェ一番星（認知症カフェ）を開催。入居しているお年寄りと共に同じ空間を過ごしました。入居者も、学生と触れ合うと穏やかな笑顔を見せていました。

コーヒーを飲みながら、お年寄りと談笑



『アトリエ一番星』 始動！！



外 観



「ピアノ教室」



「陶芸教室」

平成28年4月より、アトリエ一番星で、様々な行事を行っています。

現在は、「ピアノ教室」(毎週金曜日10時～)、

「陶芸教室」(毎週金曜日13時～)、

「りょうえんカフェ一番星」(不定期・随時対応)等を行っています。

これからも地域の色々な方々との交流を通じて、何か『学びのある活用』が出来れば・・・と考えています。

何か御座いましたら気軽に、せりょう園老人介護支援センター

(079-421-7156)まで御連絡下さい。お待ちしております。

『俳句に親しむ会』に参加しませんか！！

3月25日の神戸新聞25文化面「句集」欄に、俳人・山田六甲氏による、升田ヤス子句集「^{はまなす}玫瑰」の論評が載っています。29わがまち面・東播版には、升田ヤス子さんの写真入りで自費出版「40年の集大成」の記事が載っています。同日に載った2つの記事に関心が湧きました。

升田ヤス子さんを囲んで『俳句に親しむ会』を始めます。

毎月第2土曜日、午後1時より、

せりょう園「アトリエ一番星」にて行います。

第1回目は5月14日です。

会費も未定ですが、升田さんを囲んで初顔合わせの席で、決め事を定めたいと思います。

関心のある方は是非ご参加下さい。お待ちしております。



